

累線線全体とその一部分との比であるから後者に変動のあることは当然であるが、これがプラスかマイナスの一方に偏れば増加または減少の傾向というものが存在することになるがこの実験の結果では何らそのような傾向の存在していないことを示している。第三の問題の世界観の分化については絵によって三題の問を出し個人面接の方法で答申を得た。「子どもが母親から日没前に帰宅することを命ぜられた。日没近く、子どもが母親の命令だから自分が家に着くまでそのまま待っていてほしいと沈みゆく太陽に頼んでいる。その子が家につくまで太陽は待っているか沈むか」というようないい間である。その結果は、七〇名の幼児中、三問分化二四名、二問分化二六名、一問分化十三名、全部未分化三名となつた。会話中に現われる文章の性格は文法によらずその内容によって分類した。十分間の個人面接により質問によって会話を導きテープレコードにとって後整理する。その幼児の話しことば中の文章の総数に対して自己およびその経験した事物の状態や思想を客観的に相手に伝えた文章、説明的批判的な文章の含まれたペーセンテイジを計算する。前章の世界観の分化の実験結果をその成積の形によつて七つの群に分け、各群に属するそれぞれの幼児のこの会話中のペーセントを平均すると次のようになる。

7	6	5	4	3	2	1
分	分	分	二一	〇九%	二四名	
未	分	分	一五	八%	二名	
分	未	分	一二	七%	三名	
分	分	未	一一	七%	二一名	
未	未	分	六	二五%	二名	
未	未	未	二	三七%	一一名	
○	四	六%	七	七名		

すなわち分化の数の多い者ほど、文章の%は増加している。これを反抗期開始前後で比較することは困難（開始後に認められることなのでその直前をとることは難しい）であるので、反抗期の開始時期をすぎたものとそれ以前の者の二群に分けて、分化程度との関係を検証することとした。すなわち、たとえば三問とも分化している幼児で、会話中の文章の分化程度一%～一〇%の範囲の幼児が二名あり、中の一名が反抗期を未経験であれば、その範囲内で開始時期をすぎた者の%は五〇%である。これらの図にプロットすると、分化の数が多く、%も高い幼児に、反抗期の開始期をすぎた者が圧倒的に多い。ここには一つの傾向が現われているので、反抗期開始の時期を経過した者は世界観の上で分化しており、それと共に会話の中においても、自他の行動や思考内容を整理して発表することができやすいということが考えられる。これは年令の増加による発達と平行するとも考えられるが、三才から六才までの間で反抗期の時期はそれぞれ異なるにもかかわらずこのような値を持ったということとは、やはり反抗期の発生と何らかの関連を持つと考えてよいものではないかと思われる。

## 幼児期における自意識と 知能との相互関係について

西南学院短期大学部児童教育科

高橋さやか

ここでとりあげた自意識は、あらわれとしては、はにかみ、無口、非協力（すねる、あまのじやく）、非活動などの内向的傾向と、はしゃぐ、誇示・誇大な活動をするなどの外向的傾向とがあり、これららの傾向がかなり目立つものであって、しかもそれが、子ども自身の自己に対する注意や認識、評価に由来するものと理解される場合、そのようなあらわれをもつ子どもを自意識の強い子どもとしてみとめる、というほどの意味である。

問題になると考えられたことは、自意識に関連して、見せかけの能力と、眞の能力との間に差異があり、たとえばかなり高いIQをもつていてもかかわらず、両親からも教師からも、能力が低いものであるかのように見られる子どもがあること、そういう子どもの見せかけの能力を低下させているものが、多分に自意識からくる不適応状態にあると見られること、しかもまた、自意識と知能はある程度正比例する……知能が高ければ自意識もまた強い、という相互関係がある程度成立すると、などについてである。

西南児童教育科付属舞鶴幼稚園の最近数年間の事例研究の控えにあらわれた自意識の強い子どもについていえば、IQの最低が一二二、最高が一四八、最も頻度が多くみられるのは一三〇前後である。また逆に知能一二〇以上のものについてみると、自意識がつよいとみとめられるのが過半を占め、やや強い傾向がみとめられるものまで含めれば、殆ど全部そうだといつてよいである。

自意識の尺度について、決定的なものをもたぬまま、結論を求めるのは尚早であるが、しかし、幼児期にあつては自意識もまた心理発達の上の重要なファクターであり、心身の発達が良好であり機能が活発であるという事実と、自意識が強いこと、知能がすぐれていふことは、それぞれ別個に切り離せない相互関係があるもの、と

いう見方は成り立つといってよいであろう。

このような事情の一事例として、Fという子どもをとりあげてみると、Fは日頃非常に情緒不安定な態度で落着きがなく、注意散漫であり、製作活動などは殆ど完成することがなかつた。愛きょうはあって、明るく人づきやすいもよい方ではあるが、時たまかんしゃくを起して激しく泣いたり暴れたりするので、園の教師たちは多少問題視していたし、決して優れたことでもあるとは見ていかなかった。両親の他に祖父母とも健全で同居しており、祖父母と母とが可愛がる一方叱言や干渉の多い育て方をし、ことに他家の子と比べて優劣をいうことが多く、子ども自身も始終自分のことも他の子のことも、よいとか、だめだとか、上手とか、下手とかの評価をことごとに口にするという風であった。劣等感もかなりはつきりともつてゐるを見られたが、IQを出すと一三六を示し、この数字には両親教師ともやや意外の感を抱いたのである。

また、Nという子どもは、いわゆる「ものをいわぬ何もしない子」であったが、IQは一四八もあり、ことに語彙の習得で優れていることがテストの結果明らかになつた例である。

事例をあげていくとなお多くのものがあるが、とくに見せかけの能力が低く、眞の能力、少くともその一面を示すIQが高い例として、FとNとはかなりはつきりした形を示すものと思われた。Nはいうまでもなく内向的なタイプであつて、こういう例はむしろ通常かなり多く発見されるところであると思われる。よく親たちが能力が劣つていてるようになって思つて案じるが、発表することに自信がつけられさえすれば割合に早く円滑に自分を調整できるようになるものであるし、内心ではすでにかなりたしかな固い自尊心や自信を抱いているものであるから、まだしも取扱い上の困難が少いとも

いえるかと思う。これに對してFは、完全に外向的であるとはえないかもしないが、一応明るくおしゃべりで人づきあいがよい点、まずは外向的な傾向に屬していると見られるであろう。そして、Fの方は子ども自身が、自尊心よりも劣等感の方をはつきり意識している。かえって自分の劣っていることを口に出してそれで人を笑わせ、自分を慰めているような「道化もの」の傾向を幼いながらに見せているのである。このFのような子に自信をもたせ落着かせることはNの場合よりは困難であると考えられる。そして、知能は決して劣るものではないにしても、実際に生活者としての能力は劣るといわなければならぬこともみとめなければならない事実であろう。

幼児の中には、非常に高い知能をもち、しかも素直で活潑でわきまえがありながら少しも余計な意識や評価にわざわざれない、本当に好ましい Personality の者も、少数ではあるが存在する。してみれば、環境の条件をよく整えれば最も好ましい成長が可能なのであり、知能のすぐれた子を自意識の犠牲にするのもさけられるといえる。知能と自意識との相互に関連深い発達は、さきに述べたように発達それ自体の当然のなりゆきとしてもみられると同時に、その子をめぐるおとなたちの自意識の押しつけや誘発も相当な因子として考えられる。子どもの教育に当つて（自意識に関連して）見せかけの能力については常に再考の必要があり、また真の能力の正當な成長を阻害しないための心づかいが重要なことなどについて、注意すべき点をいくらかでも明らかにしたいとつとめた。

なお幼児期においては、知能と自意識とは、ほぼ正比例するが、児童期の終りから思春期にかけてはしばしば、反比例する例もあると思われ、その間の事情に対しても調査検討をつゞけたい。

## 幼児指導のための

### パーソナリティの一調査

北海道教育研究所員 小林幹夫

#### 一、研究のねらい

幼児指導にあたつて、幼児をどうみるかがいかに重要であるかをここ数年来研究をつづけた。前回にひきつづいてパーソナリティの面から幼児の実態をとらえること、とくに今回教師側の幼児の性格、行動の観察を取り上げ、望ましい指導に役立てるために、種々の問題を考察した。

#### 二、調査の対象と実施経過

北海道の三つの地区から、それぞれ施設を選んで大略次のように調査をすすめた。

#### 第2次 調査報告分

(略称)	施名	設	(対象人員)	(先生)	(調査期間)	(調査種目)
(I) 小学一年	美唄市立第一小学校		一年生	五名	八	
(II) A 施設	函館市立函館幼稚園		全園児	七名	三年四月～六月	家庭・一式・二式
(III) B 施設	札幌市立発寒幼稚園		全園児	七名	三年三月～五月	家庭・一式・二式

本報告においては、それぞれの施設名と略称をもつて示してある。  
三、調査方法